



かわいい子には 旅をさせろ

副校長 山中 朗

1学期の終業から始まった長い夏休みも終わり、学校には子どもたちの元気な顔と声が帰ってきました。日焼けして、少したくましくなって戻ってきた子どもたちの顔を見ていると、教員の方も「よし、2学期も頑張るぞ!」という気持ちになります。夏休み中の学校というのは、何か味気ないもので、建物全体がガラーンとして寂しいものですが、子どもたちがいると活気に溢れ、にぎやかになります。やはり学校は子どもたちがいてこそ輝く場所なのだなあと、しみじみ思います。

さて、今年の夏休みは、お子さん一人一人にとって、充実したものになったでしょうか。体だけでなく、心も成長する経験ができたでしょうか。昨年度の巻頭言では、私の子どもの頃の夏休みの思い出として「自由研究」の顛末について書かせていただきましたが、今回は「祖母宅への大冒険旅行」の思い出について書いてみたいと思います。

父方の故郷が高知県で、6つ離れた兄が中学生になった頃から一人で祖母のところへ遊びに行っていることは知っていました。私が兄のお伴として高知の祖母宅へ遊びに初めて行ったのが、たしか小学3年生の夏休みだったと記憶しています。

なにしろ40年程前のことなので、中学生の兄が一緒とはいえ、子ども二人で高知まで行くには大変な行程でした。朝の5時には自宅を出て、まずは電車で東京駅まで向かいます。東京駅で弁当を買い、いよいよ東海道新幹線に乗りこみます(たしかいつも「こだま」だったような…)。6時間くらいかけて岡山駅へ到着すると、連絡船乗り場まで在来線で向かいます。連絡船に乗り瀬戸内海を渡り、やっと

四国に上陸です。その後、在来線で高知県の土佐山田駅というところまで行き、そこへ叔父が迎えに来てくれるのです。更にそこから叔父宅へ招かれ小休止。少し旅の疲れをいやした後は、いよいよ最終行程「車で移動」です。叔父宅のある土佐山田から、祖母の住む「押谷」(「おすだに」と読みます)までの1時間強の間、ただでさえ東京とは違う“田舎感”から更に“秘境感”へと移り変わる眺望の変化に、ある種の“恐怖感”が芽生えたのをはっきりと覚えています。いよいよ祖母宅へ到着しました。東京からの所要時間、約12時間。「すごいところに来ちゃったな・・・。」と早くも浮かれ気分が来たことへの後悔が頭をもたげます。しかし、そんなヘトヘトで情けない私が目にしたのは、祖母の底抜けに明るい笑顔でした。「えらいとこへ、まっことよう来た!」と高知弁で私を抱き寄せ喜ぶ祖母。会う前に感じた様々な思いを、なぜか申し訳なく思う私がいきました。

その後、近くの家に住む(といっても歩いて20分くらいかかるところですが)同年代の子と仲良くなり遊んだり、川へ泳ぎに行ったり、歩いて1時間かけて町へ出て買い物をしたり、兄と喧嘩をして、田舎道を一人取り残されたり、様々な体験をしました。そのどれもがかけがえのない夏の思い出となり、今も私の中に生きています。

「かわいい子には旅をさせろ」と昔から言いますが、こんな“非日常”から、子どもたちはいろいろなことを学びとっていくものなのでしょう。これから子どもたちから聞ける夏休みの思い出を楽しみにしたいと思います。

9月の生活目標『学校のきまりを守ろう』

高二小には、全校児童全員が楽しく安全に過ごすためのきまりがあります。2学期が始まるこの機会に、今年度初めに確認した「学校のきまり」についてもう一度共通理解を図り、改めて指導していきたいと考えています。

ご家庭でも「たかにハンドブック」を手に取って、通学路・登校下校時刻・校舎内外での過ごし方・生活時程・持ち物など、今一度お子さんとともに確かめていただけるとありがたいです。